

## 待ち望んだ突然変異

藤井颯太郎

二月の深夜、寒空に向かつて一匹のセミが鳴いている。散歩中に不可解な光景を見つけた男は首を傾げた。しばらくして男は、これがとんでもないビジネスチャンスだと気づいた。彼は製薬会社に勤めていた。主にアンチエイジングを目的とした美容品やサプリメントの研究をしている。ご存知の通り、セミは夏に地上へ姿を現し、騒々しい鳴き声で求愛し、一週間ほどで死んでしまうのが普通だ。いま鳴いているこのセミを研究すれば、アンチエイジングや若返り、ひいては不老不死の謎を解く重大なカギになるのではないだろうか。

男はセミを研究室へと持ち帰り、あらゆる方法で分析を試みた。そして遺伝子情報の一部に、明らかに通常のセミとは異なる部分を見つけた。これがこのセミを長寿にしている要因に間違いない。この大発見に男はうち震えた。かくして、男のセミ薬の研究が始まった。情報が外部に漏れることがないように、研究はほとんど自分一人が進めた。あつという間に五年の歳月が過ぎ、それは完成した。太古の昔から人類が夢に見た、不老不死の薬を完成させたのだ。

セミ薬は発表と同時に大きすぎる反響を得た。どれだけ価格が高くとも金を出し惜しむ人はいない。何せ寿命を金で買えるのだ。当然、セミ薬は大ヒットした。それだけにとどまらず「セミは身体に良い」というイメージが広がり、巷ではセミコーヒーやセミグミ、セミスムージーやセミカレーといった商品が続々と発売されるなど、世界的なセミブームが巻き起こった。人間の平均寿命は伸び続け、保険屋や葬儀屋は転職を余儀なくされた。

だが良いことばかりでもなかった。セミ薬の発売から五十年、全く別の問題が持ち上がる。生まれてくる子供の数に変わりはないが、上の世代は一向に減らない。世界人口は増加する一方で、人類は深刻な食料危機に直面した。あらゆる手を尽くすも、解決することは叶わず、遂に安楽死を合法化し推奨する国が現れる。政治家は安楽死がいかに素晴らしいものであるか喧伝し、安楽死を題材にした恋愛映画がヒット、安楽死の体験談をまとめた本がベストセラーになるなど、安楽死は時間をかけ少しずつ日常に溶け込んでいった。

開発者の男の妻が自ら安楽死を申し出たのは、奇しくも二月のことだった。あのセミを発売した二月から九十五年の歳月が経っていた。男はもろろん反対した。人類が長年追い求めた不老不死の夢を実現した自分が、何故大切な人を失わなければならないのか。すると妻は、息子夫婦から届いた手紙を取り出した。そこには、やっとの思いで新たな命を授かったこと、少しだけで良いので米や野菜を分けて欲しいということが書かれていた。妻はその手紙を読み、自分の人生の終わりを、自分で決めることにしたのだという。安楽死カプセルの中の妻は美しく、落ち着いた様子で眠りについた。

息子夫妻には無事娘が生まれ、妻の名前が付けられた。孫娘が十歳になる頃、男は「あの子もそろそろ食べ盛りだろう」と、安楽死を決意したことを息子夫妻に打ち明けた。妻がいなくなつてからというもの、男は日に日に生きることへの執着が薄れていくのを感じていた。ただ一匹、求愛する相手のいない二月の空に鳴き続けた、あのセミの気持ちかわかるような気がした。

男は孫娘をつれて最後の散歩へ出かける。川べりや田んぼのあぜ道を歩き、長すぎたこれまでの人生を思い返しながら、いつもより長い散歩をした。ふいに孫娘が足を止め、なにかを指差した。みると、視界に広がる田園の一角に、金色に輝く稲穂が実っていた。真冬の散歩中に出会ったこの不可解な光景を前に男は、孫娘とともに首を傾げた。

